

〈研究ノート〉

階級文化をめぐる*

難 波 功 士**

【0】 はじめに

“Class in Britain”の著者イヴァン・リードによれば、1990年代後半、ジェンダーやエスニシティについて関心が集まる中¹⁾、階級について論じることは、政治的にも社会的にも、社会科学においてもチャレンジ的な作業であり、それは、「石炭自体やその有用性の消滅によってではなく、他の燃料の持つ魅力の相対的向上という変化による、石炭産業の低落と酷似している」という(Reid, 1998: xix)。現に、「最近の広範囲にわたる世論調査は、90%の人が依然自身を特定の階級においており、73%の人が依然階級は英国社会の不可欠な部分であり、52%の人が依然明快な階級格差が存在すると思っていることを示している。階級は文化的政治的には不可視なものになりつつあるが、それは依然英国社会に不可欠な要素である」(Storrey & Childs, 2002: 178)。

とりわけ「労働者階級 (working class)」に関して言えば、たとえば2002年8月22日付ガーディアン紙によると、「現在、『労働者階級であり、そ

のことに誇りを感じている』人の数は、1997年の58%から68%へと上昇しており、組織化されたプロレタリアートの末裔に対する、サッチャーのプログラムへの記憶が、炭鉱町にまだくすぶっていた94年の52%をも上回って」おり²⁾、また03年3月4日付同紙によれば、「最新の数値では、社会的階級のトップ3の若者の48%が大学に進む一方、ボトム3出身の若者の18%が進学するに過ぎない」といったギャップが現存し、高等教育局長は何らかの対策を講じる必要があると述べている。イギリス社会において労働者階級という存在、もしくはそうした概念は、絶滅しつつある種族でも、過去の遺物でもない。このような動向は、労働者階級 (のコミュニティ) への郷愁をモチーフにしたイギリス映画のスマッシュ・ヒット——炭鉱町のプラスバンドを題材にした「プラスド・オフ」、80年代の炭鉱ストライキを背景とする「ビリー・エリオット」、かつて製鉄で栄えた町の失業者たちによる「ザ・フルモンティ」など、いずれもイングランド北部の鉱工業地帯を舞台としている——や、ケン・ローチやマイク・リーといった労働者階級を描き続ける監督の健在

*キーワード：階級文化、カルチュラル・スタディーズ、ユース・サブカルチャー

**関西学院大学社会学部助教授

- 1) 戦後のイギリス社会の変化によって、「労働ベースのアイデンティティは、他のアイデンティティのソースとも交差し始めた。ジェンダーとエスニック・アイデンティティの重要性の増大や、マスメディアの多様な消費ベースのライフスタイルの強調は、個人が自身のアイデンティティを構築する主役なのだという自覚を強化してきた」という (Mackintosh & Mooney, 2000: 96-7)。だが、それはイギリス全土で一般的な事態ではない。たとえば国家統計局の1999-2000年調査によると、エスニックマイノリティの人口は、インナー・ロンドンで25.6%、中西部大都市圏で14.6%に達するものの、スコットランドでは1.3%である (Storrey & Childs, 2002: 211)。
- 2) 「1998年初頭の、ラジオフォー・トゥデイという番組によるICM世論調査によれば、55%の人が、自身を『労働者階級』とアイデンティファイしている。それは、49年よりも12%アップしている。非常に一般的な意味で、アンドリュー・アンソニーがオブザーバー紙でクラスについての記事で議論しているように、階級は認識の問題であるが、驚くべきことに、階級が政治的な争点をもたず、『ミドル・イングランド』がミドルクラスであることの同意語とみなされているにもかかわらず、多くの人々が自身を『労働者階級』と述べている」 (Roger, 2000: 52)。

ぶりからもうかがえよう³⁾。

そうした一種の労働者階級再評価の動きの中で、イギリスでは「階級文化」研究も、理論的・実証的に新たな展開をみせている。本稿ではその概略を紹介しながら、ユース・サブカルチャー研究への含意を検討しておきたい。

【1】1960～70年代：CCCSの遺産

イギリスにおける「階級文化」研究を考える際、その出発点となるのは、やはりバーミンガム大学のCCCS（現代文化研究所）——レイモンド・ウィリアムズが、「文化」という概念を「a whole way of life」の問題としてとらえ返し、リチャード・ホガートが自らの出自を振り返りつつ、労働者階級文化がマスカルチャーに凌駕されつつある現状を憂い、エドワード・トムソンが「労働者階級の形成」を歴史的にたどった1960年代前後——であろう。

これら諸研究を受けて、エリック・ホブズボウムは、「マス・プロレタリアートのスポーツとしてのフットボール（ほとんど現世的な宗教に近い）は、1880年代に生み出され、北部の新聞が試合の結果を読者の興味を引くよう紙面一杯に報道し始めたのは1870年代の終わりのことである」、「労働者階級の典型的な海辺の休日、ホリデイ・リゾートは、ランカシャーのブラックプールに代表されるように、1880～90年代に形づくられた」、「1950年代までの標準的なレディメイドフー

ドの提供者であるフィッシュアンドチップス・ショップでさえも、ランカシャーでは1865年以前には存在しなかった」、「イギリスのミドル諸階級とは違い、イギリスの労働者はローカルな方言を、標準的英語へと取り替えることはしなかった」、「1870～80年代のイラストや写真が示すように、ヘッドギアは様々であり、帽子を被ることすら標準化されていなかった。しかし1914年には、イギリスの労働者の集合写真は、仕事であらうとなかろうと、flat peaked capの海というおなじみの姿となっていた」など、レジャー・食生活・言語・ファッション・メディアといった指標から、「潜在的市場としての労働者階級のサイズの成長と、生活費の急速な下落の時期に起こった平均的な実質賃金の目覚ましい上昇」を背景に、1880年代に労働者階級文化は萌芽し⁴⁾、「その後の20～30年の間に形づくられた」（Hobsbawm, 1984：184～200）と結論している⁵⁾。

まさに、「労働者階級は、産業革命によってのみ作り出された——“蒸気機関+工場=労働者階級”——ものではなく、政治的な反革命や、新たな経験としての、受け継がれた文化的伝統のreworkingによっても生み出された」のであり、労働者階級文化の「均一性 homogeneity（と示差性 distinctiveness）の度合いは、明らかに歴史の変数である。1880～1930年代の労働者階級文化は、その前後のどの時期と比べても、より均一的で示差的であった」わけだ（Johnson, 1979：221～235）。

- 3) もちろん映画以外の領域でも、階級はUKにおけるさまざまなコンテンツにその影を投げかけている。「奇妙でエキゾチックで幾分かっけいなロッド・スチュアートの過剰な衣装は、労働者階級の元モッド的ヘアスタイルやタフな顔の表情と結びついている。…その環境の華麗さにもかかわらず、ロッドは変わっておらず、そのロイヤリティは、その出身階級に残しているように思われている（これは、そのアクセントや外見、フットボールへの傾倒など他のコンテクストによっても表現されている）」（McRobbie, 2000：112～3）。また、かつての産業革命期の労働者階級コミュニティが、ノスタルジックなツーリズムの資源となってもいる（Urry, 1995＝2003）。
- 4) 当然この場合の「文化」とは、「社会人類学で一般的なより広義な用法によるものであり、ミドルクラスの感覚にもとづくより狭義な『文化』（すなわち、自己完結的な現象としての文学や美術）は、労働者階級の生活の一部ではない。…イギリスの労働者にとっては、『ブック』という語は雑誌と同義語であり、『シアター』は映画館さなければある範囲のミュージックホールを、『ピクチャー』は映画を意味する」（Hobsbawm, 1984：185）。
- 5) 「そして、われわれの知っている『ミドルクラス』も、この時期に登場しており、それはヴィクトリア朝初期・中期の先行者や『ザ・エスタブリッシュメント』のアップーブルジョアジーとは大きく異なったものであることも、付け加えるべきであろう。突然の flat peaked cap の出現と平行して、オールドスクールタイは出現し、ゴルフクラブはさらに急成長をとげた。1890年から95年にかけてヨークシャーでは29のコースが開かれたが、1890年以前には、そこにはたった二つのコースしかなかった」（Hobsbawm, 1984：200）。

そして、こうした労働者階級文化への注目の中から、CCCSの大きな成果である「ユース・サブカルチャー」研究が生み出されていく。有名な『儀礼による抵抗』の議論を、ごく簡単にまとめてしまえば、戦後ロンドン・イーストエンドなどの労働者コミュニティが、ブルジョアジー化と都市再開発（ジェントリフィケーション）による解体の危機にみまわれる中、まず労働者階級出自の若者・逸脱文化としてTeddy boys (Teds) と呼ばれる独特のファッション・スタイルを持つ集団が登場し⁶⁾、以後60年代には、店員・事務員などの職を得て労働者階級からより上方への脱出を試みるModsと、非熟練・半熟練のマニュアル・ワークに従事し、マスキュリンな価値観を保ち続けるRockersとの間の抗争があり、60年代後半には、ミドルクラスを出自としながらも社会からの離脱をはかるヒッピーが登場する一方で、よりアンダークラスへと転落することへの危機感を背景に、親世代の労働者階級文化の、極端なかたちでの再生産ないし「伝統の創造」を行い、そこに過度に自身をアイデンティファイするSkinheadsが出現する、といった見取り図になろう。

こうした若者たちのサブカルチャーを、その階級的なバックグラウンドから説明し、社会構造の中に位置づけていく手法は、「デビッド・ボウイのスタイルは、労働階級（とスキンヘッド）文化のスタイルとアンダーグラウンドの文脈との、様々なテーマの複合である」（Mungham & Pearson, 1976: 116）といった「グラムロック・カルト」研究や、エスニシティの問題を組み込みつつPunksを論じたディック・ヘブディッジの『サブカルチャー：スタイルの意味するもの』などへと引き継がれていった。

これらのサブカルチャー研究に対しては、もちろん「スキンヘッズやバイクボーイズやヒッピーなど、すでに名札を与えられた特定のサブカルチャーの成員をグループとして取り上げ、その階級的位置を明らかにするところから始まる。それゆえこのアプローチは、同じ基本的な階級的位置

を共有しながら、そのサブカルチャーの成員ではなかった若者たちを除外してしまう」（Mungham & Pearson, 1976: 25）といった懸念は、早くから示されてきた。だが、ポール・ウィリスなどは、『労働を学ぶ：いかにして労働者階級の子供は労働者階級の仕事に就くか』において、ごく一般的なLadsたちの生態を生き活きと描き出したりもしている。

以上、1970年代までのCCCS、およびその周囲にあった人々の「労働者階級文化」研究を概観してきた。そこに一貫しているのは、それ以前の反映論的な、下部構造還元論的な階級意識論とは一線を画しているにせよ、人々のウェイ・オブ・ライフを、その所属（ないし出身）階級、もしくは階級間の葛藤によって説明し、社会構造の中に位置づけようとする視点であった。

【2】1980～90年代：CCCSへの批判、もしくは現実との齟齬

「UKとUSAにおいて、私達は雇用のパターンと労働の組織と経験との大きな変化を目撃してきた。1950年代にサービス業と比較して製造業での雇用は減少し始めており、68年の激減、さらには79年には壊滅的な減少をむかえる。66年には860万人の人が製造業で働いていたが、81年には540万人となり、この傾向は変わっていない。90年代までに、主要な三つの産業セクター（建設・鉱業・製造）での雇用は、国全体の仕事の4分の1足らずとなった。逆にサービスセクターでの雇用においては、新たな種類の『諸サービス』が、売り出された。90年代までには、サービス業は1500万人を超える雇用を提供し、全雇用の70%を占めている」（Rowbotham & Beynon, 2001: 32）

前節でみたようにCCCSの文化研究は、さまざまな変数を取り込みつつも、基本的には「労働」や「生産」関係をその考察の基点にすえてきた。しかし、社会環境はこの数十年で大きく変化して

6) 「結局、テディボーイは、過去の伝統的な都市労働者階級社会と、未来の増大するコンシューマリズム、アメリカナイズーション、ホガートに酷評された『綿菓子 (candy floss)』のような大衆娯楽との間をまたぐ過渡的な形態であった」（Springhall, 1986: 191-2）。一方近年、戦前の労働者階級の若者文化の中に、戦後の萌芽がすでにあったことも指摘されている（Fowler, 1995）。

おり⁷⁾、とりわけメディア環境の変化が、従来の労働者階級文化への大きな脅威となったことは、多くの論者が指摘するところである。たとえば、「1958年までに、社会的階級とは無関係に、テレビは世帯のマジョリティを占めるようになり、家庭の必需品として急速に受容されていった。テレビ視聴者の数が、ラジオ聴取者のそれを追い抜き、映画の観客の数は減少を続ける中で、テレビは、大衆ドラマと現代の社会生活を表象するノンフィクションの両方の、支配的な文化的形式となった」(Laing, 1986: 143)。このようなマスメディアによるマスカルチャーの世界では、生産や労働よりも、「消費」や「趣味」が人々のアイデンティティの核心となっており、旧来の「階級」概念は説明力を失いつつある。

一方、マスカルチャーから離反し、それに反発するサブカルチャー（ないしカウンター・カルチャー）に関しても、「クラブ・カルチャー」研究者たちによってそれら諸文化のクラスレスな性質が強調され (Redhead, 1997; Thronton, 1995; Malbon, 1999)、ヘブディッジのパンクス理解の「階級偏重」な側面が指摘され (Muggleton, 2000)、1980年代に生まれた Goth などは、階級からは説明不能であることが明らかにされるなど (Hodkinson, 2002)、CCCS のユース・サブカルチャー研究は、さまざまな批判にさらされている (Cagle, 1995: 37-41)。

もちろん、これは「サブカルチャー」という概念をどう定義づけるかという問題でもあり、フィル・コーエンのように、あくまでも「私の意見からすれば、サブカルチャーは被支配 dominated

文化から生まれるのであって、支配的 dominant 文化からは生まれない以上、ミドルクラスはサブカルチャーを生み出さないと考える」(Cohen, 1980: 86) とする立場も可能であろう。しかし、CCCS など従来の「若者の社会学における文化的アプローチへの私の批判の含意は、それらが若者たちを、しばしば明瞭にそうでないにもかかわらず、本質的に問題的で反逆的だとみなすという前提の上に成り立っている点にある」(Miles, 2000: 9) との指摘は、じゅうぶんに説得的である⁸⁾。サブカルチャー概念の検討は別稿にゆずるが、やはり階級（間の葛藤）や、それにとまなう抑圧・抵抗、もしくは商業化による搾取・被搾取の問題としてのみ（ユース）サブカルチャーを論じることには限界がある。

だが、メインストリームな文化においても、オルターナティブな文化においても、階級文化（特に労働者階級文化）の影が薄くなる一方で、以下のような状況は依然存在する。

「労働者階級の人々の多くは、消費支出のより高いレベルを望んでいるように思われる。その労働から生み出される力は浸食され、モノを買う力によって置き換えられる。それは、『私たちはこれこれを買う者である』という傾向へと人々を導く。労働者たちは、より金銭中心で、家族中心で、個人主義的になっている。家やクルマの所有が、労働者階級のエリアでも、ステイタス向上のシンボルとなってきた。／しかし、この文化革命は、もはや労働者階級が労働者階級と完全に感じなくなったことを意味しない。労働者階級の人々

7) こうしたマニュアル・ワークの減少は、以下のウィリスのラッツ論への批判に見られるように、ある一面では労働者階級の人々に歓迎された事態でもあった。「ウィリスは彼のラッツが代表だと主張していないにもかかわらず、そのファインディングスは、まるでそれが労働者階級全体を語るかのように存在している。…少年たちは徒弟 (apprenticeships) を希望するし、少女たちは店頭や工場で働くよりも、オフィスで働くことを切望している。こうした労働者階級の欲求は、最近に始まったものではない。労働者階級の父は、その息子に勉強することの美德を教え続けてきた長い歴史を持つ」。一方、「ウィリスはまた、その含意として、ミドルクラスの若者を受動的な conformist として描いたことで批判されている」(Roberts, 1995: 89)。

8) スティーヴン・マイルズは、CCCS のサブカルチャー研究を批判し、それら若者文化をライフスタイル概念で捉え直すことを主張する。しかし、生産や労働の問題をすべて捨象し、若者文化を消費（文化）の枠内に限定された、恣意的なスタイルの流行としてのみ語るのも、また極論であろう (Miles, 2000)。そうした議論は、「レイモンド・ウィリアムズやエドワード・トムソンのようなニューレフトの思想家の著作と呼応するかのように、(マーケッターである) ホブソンは、階級はいまや単純に経済的指標によって理解されるのではなく、ウェイズ・オブ・ライフまたは『ライフ・スタイルズ』を含む、文化的指標として理解される必要があると主張した」というように、容易にマーケティング理論と節合する (Mort, 1996: 132)。

が階級について語るのを聞くと、私たちは彼らがミドルクラスと依然感じていないことを発見する。未だに彼らは、階級が彼らの生活に決定的なインパクトを有していると信じており、彼らは階級が英国流生活の重要なパートだと考えている。それゆえ、労働者階級の人々は、依然自身を特定の階級の一部だとみなし、彼らがクラスレス社会に生きているとは思わない。だが、現代の労働者階級の非常に多くは、政治的に無関心である」(Storry & Childs, 2002: 192)

よく言われるように「社会調査において、英国の階級は職業によってはかれ、米国の学術的ないし政府の調査では、収入ないし学歴によってはかれる。今日、多くの階級理論家たちは、資本と労働といった議論を無視しがちなウェーバリアンとなっており、この領域においてもマルキスト・モデルは凋落している」(Munt, 2000: 3)わけだが、「ミドルクラスの収入の獲得は、ミドルクラスへの社会的統合へも、ミドルクラスの地位・アイデンティティ・政治的選好の採用へも、自動的に導かれるものではない」(Robert, 2001: 91)。現に、古典的なマニュアル・ワーク従事者の比率は減少しているにもかかわらず、先の引用のような事態が生じている。このことをいかに理解すべきだろうか。今、CCCS 的な階級文化研究から、どのような方向への転換を迫れているのだろうか。

【3】2000年～：流動化しつつ、再構築される「階級」

まず注目すべきは、近年 CCCS につらなる系譜の中でも、階級概念の捉え直しの作業が進んでいる点である。たとえば、「マルクスは、class in itself と class for itself を区別していた。クラスはまず生産手段との関係において定義されるけれども、その行為者が意識上の common type を発展させ始めるときには、それは人々の単なる集合以上のものとなる」(Robert, 2001: 9)。それは、経済的な構造に基づく所与のものとしての階級、ないしは本質主義的な労働者観から、自己定義としての「労働者(階級)」へ、それら「労働者」

たちが構築し、また構築されるものとしての階級(文化)へ、という視点の転換である。もちろんそうした視点は、エドワード・トムソンなどにもじゅうぶん意識はされていたが、彼の描いた労働者階級(文化)の構築の過程のみならず、現在に至るまでの、その絶え間ない再構築の過程においても、人々はその時代・その社会における労働者階級文化を実践する中で、自身を労働者として措定し直し、その文化の再生産・再創造を行ってきた。

たとえば、テレビ番組一つをとってみても、自明に「労働者階級(文化)的なもの」があるわけではない。

「80年代半ばまでに、労働者階級の人々は総じて、ミドルクラスの人々と同様な見方で、ドキュメンタリーを求めているわけではないという結論に達した。おおむねドキュメンタリーは、ミドルクラスが労働者階級と関係を持たんがために作られている。大概の労働者階級の人々は、よりファンタジーや物語に興味を持っており、彼らが犠牲者として構築され、教化の対象とされるようなことは好まないように思えた」(Rowbotham & Beynon, 2001: 178)

こうしたテレビプロデューサーの回顧にもあるように、労働者の姿が表象されてさえいれば、それが労働者階級文化のコンテンツとなるわけではない。一方、その労働者階級のファンタジーや物語に応えたソープオペラ「イーストエンダーズ」は、労働者階級の視聴者を対象としたという意味でも、労働者階級的である。この番組は、ITV やチャンネル4からのプレッシャーに反応し、視聴率の多くを獲得しなければならなかったBBCによって制作された。その共同制作者であるジュリア・スミスは、明確に視聴者は労働者階級であると想定し、ビンゴやパブに出かける前のティータイムに、この番組をテレビで見ている視聴者をイメージしていた」。

CCCS の研究において、モッズやロッカーズたちのインキュベーションの場とされた労働者階級の街ロンドン・イーストエンドへは、その後西インド諸島やインド亜大陸からの移民が多く流れ込

んできたが、この1985年に始まるドラマシリーズ「イーストエンダーズ」でも、「女性・黒人・アジア系のキャラクター、ゲイ・ライフスタイルなどを表象しつつも、一貫して労働者階級の生活が描かれて」(Rowbotham & Beynon, 2001: 211)おり、労働者階級の視聴者は、このドラマを同じ時間、同じように視聴する他の人々の存在を意識することで、その視聴者たちの間の、一種の共同性を想起しうるわけだ。つまり、労働者階級的な受容や使用を通じて、このドラマは労働者階級文化を構成するコンテンツとなっていくのである。そしてその共同性までをあるウェイ・オブ・ライフの分有だと考えれば、労働者階級文化は、労働や生産の場から離れはしたものの、メディア(消費)のもとらす「想像の共同体」によって再生産されている。かつてホガートが考えたように、マスメディアは労働者階級のコミュニティや文化を蹴散らしていくだけではなく、そのメディア上のセグメントによっては、新たな労働者階級の(メディアエイトド)サブカルチャーを産み出す可能性をも秘めているのである⁹⁾。

また、労働者階級の若者文化であるラッズ・カルチャーも、現在、よりフレキシブルに捉え直されるべきではないだろうか。ニューキャッスルの若者たちの夜遊び(night out)を精査したロバート・ホーランズによれば、「この社会的に構築された男性的なローカル文化の事例は、職業的な履歴の特定の要素や『ハードラッズ』の外見を強調しているが、ごくわずかな青年しか仕事をしておらず、肉体労働にも従事してないのにもかかわらず、ある回答者は、『ワーキングマンの週末』の祝典を続けているのだとコメントしている」(Hollands, 1995: 71)という。時に大学生までもが、その地域に根づいた「ラッズ」としての自意識を抱き、行動する現状は、なにもニューキャッスルのいわゆる Geordie¹⁰⁾——ロンドンの

Cockney、リバプールの Scouse、バーミンガムの Brummie など、各地の「下町っ子」と同様の語感を持つ——だけに限ったことではない。また、こうした“new lads”に関して、イメルダ・ウェルハンは、その構築過程における、青年向け男性雑誌が果たす役割の大きさを指摘する(Whelehan, 2000)。

そして性差に関しても、新たなラッズ・カルチャーは多分に流動的である。「大学生は、(夜遊びの)グループで男女がミックスする／しないに関してよりカジュアルなのに対して、地元民は lads と lasses が分かれて夜遊びする伝統をより強固なものとしている」(Hollands, 1995: 49)といったマスキュリニティ(ホモ・ソーシャルな価値観)が維持される反面、ウェルハンは、“laddette”ともいふべき女性たち——パブでビールをあおり、あけすけに性について語り、殴りあいの喧嘩も辞さない——の登場を指摘している(Whelehan, 2000)。

これまで脇役に追いやれてきた女性をも取り込むような、労働者階級文化(特にその若者文化)の可塑化とその不断の再構築のプロセス。それと同様の振幅は、エスニシティの問題に関しても見受けられる。たとえば、「西インド諸島出身者は、その文化的パターンの多くは労働者階級の若者のそれとより近い——アジア系の人々の内省的で、家族中心主義で、地位向上を指向する生活様式がミドルクラスの外観に近いのに比して——がゆえに、おそらく、その地域の文化同質性への脅威は少なかった」(Mungham & Pearson, 1976: 155)というように、労働者階級文化がつねに、すべての移民に対してゼノフォビックであったわけではない。

そして、「卓越したバイオリニストであるナイジェル・ケネディは、全国紙が非常に posh なミドルクラス・ファミリーの出であると報じている

9) こうした「メディアに媒介された労働者階級文化」の大きな画期は、やはり60年代のテレビの普及(と労働者階級ソープ「コロネーション・ストリート」の開始)であろう(Gillet, 2003)。雑誌メディアによる、労働者階級文化の少女版の構築過程としては、「現実の生活において、(大衆的なスーパーマーケットである)TESCO clothes にはエキサイティングなものは何もないが、ジャッキー誌はそれをハイファッションのように見せる」(McRobbie, 2000: 108)。また、フットボールをめぐる lads fandom にしても、1960年代に労働者階級の中の豊かな層によって「創られた伝統」の側面が強く、そこには新聞やテレビなどが関与していた(King, 2002)。

10) アンディ・ベネットは、ニューキャッスルの音楽シーンの分析を通じて、ポピュラー音楽がローカル・アイデンティティ構築に果たす役割を分析している(Bennet, 2000)。

にもかかわらず、Cockney lad アクセントを採用している」(Storry & Childs, 2002: 179) ように、「経済的な所属(出身)階級とは異なる階級への帰属意識にもとづく労働者階級文化」すらも生まれつつある。それが単なるノスタルジーではなく、新たな現実を産み出している現在、それを捉えうる「階級(文化)」概念の再定義が不可欠であり、その階級というファクターを排除するのではなく、アイデンティティの源泉のワン・オブ・ゼムとして含み込んだかたちでのユース・サブカルチャー研究の枠組が、早急に整備される必要があらう¹¹⁾。

【4】おわりに

以上、戦前までのイギリス社会において圧倒的な規定力を有していた「階級」のプレゼンスが弱まり、ジェンダー・エスニシティ・世代・ローカリティ・メディアといった他の諸要因との並存、ないしそれらとの輻輳の中で、ある人間のアイデンティティが社会的に定められ、かつ個人的に選びとられている現在、一つの文化(集団)へ全面

的な帰属というよりは、シチュエーション毎のパートタイムでの参加が常態となっている現在について言及してきた¹²⁾。そして、「(労働者)階級」が、その古典的な意味あい(とそれを支える社会的基盤)を失いながらも、依然一定の効力を保ち続けている現状を見てきた。中でもラッズ・カルチャーは、2002年8月22日付ガーディアン紙が「ラッズにはよりよい階梯が必要(Lads need better ladders)」と題された記事において、GCSE(一般中等教育修了試験)の結果は女子の方が優秀であり、男女間のギャップは「反学校的なラディッシュ・カルチャー」に起因すると伝えているように、その生命力の強さは特筆すべきものがある。

もちろん、こうした『『近代的』労働者階級アイデンティティとイングリッシュ・アイデンティティは、民主的国家が、それ自身の『文化』をもつ労働者階級を独立した(ただし従属的な)存在として認識するような、労働者が自身を『労働者階級』かつ『イングリッシュ』として同定できるような、共通の基盤の上に生まれた」(Steele, 1997: 46) のであり、労働者階級文化(とりわけ

11) 大まかな研究の流れとして、生産関係における「階級」から、消費のスタイルないしテイストとしての「階級」へ、所与のものとしての「階級」から、構築されるものとしての「階級」へ、identified された identity から、identifying する identity へ、といった諸点が指摘できるであろう。ユース・サブカルチャーに関して、ワイン&ホワイトは、若者のアイデンティティには、消費を通じたアイデンティティと生産を通じたそれとがあり、さらに前者は「文化の消費(Consumption of culture)」と「文化の流用(Appropriation of culture)」に、後者は「文化の生産(Production of culture)」と「文化の再生産(Reproduction of culture)」に分けられるとしている(Wyn & White, 1997: 86)。彼らの考える「文化の生産」とは、60年代の対抗文化などを、「文化の再生産」とは、商業化された対抗文化にさらに対抗する、政治的なラディカリストなどの文化をイメージしている。これまでの議論にひきつけて考えてみると、「イーストエンダー」のようなコンテンツやパブでのビールなどの消費を通じての、労働者階級文化の一員であることの確認(文化の消費)、そうしたラッズ・カルチャーを転用したラデット・カルチャー(文化の流用)、それらラデットたちの要求に応える男性ストリップパーズたち(文化の生産)、さらにそれを真似て一儲けを企むうちに、自らの出自であるラッズ・カルチャーを再確認していった「ザ・フルモンティ」の失業者たち(文化の再生産)、となろう。しかし、ウィリアムズにならない、「文化」を a way of life の総体と規定すると、「消費」「流用」「生産」「再生産」といった行為のいずれもが「文化」たり得る。つまり「文化の消費の文化(=何らかの意味づけを与えられているモノや行為を、購入・利用することによって自らのアイデンティティを確保するという消費文化)」、さらには「文化の流用の文化(何らかの意味づけを与えられているモノや行為を、加工し、アレンジすることによって自らのアイデンティティを担保する消費文化)」も考えられるし、また「ザ・フルモンティ」の例のように、消費の受け手と送り手は、容易に交代可能であったり、協働しながら文化の消費・生産の場を構成していくような関係にもなりうる。

12) イギリス国外へと視野を広げると、オーストラリアのスキンヘッズたちが「語り、解釈し、構築している彼らの社会的文化的世界、すなわち彼らの『状況の定義』に耳を傾けるならば、彼らはエスニシティの観点を最重要としているのである。その明確なワーキングクラス・エートスの欠落ゆえに、エスニック・カテゴリー『イングリッシュ』は、はるかに明示的な特徴となっている」(Moore, 1994: 10) ように、イギリス国内では労働者階級の(ないしそこからの転落の危機に瀕する)若者たちの問題として捉えられてきたスキンヘッズは、異なる文脈においては、イギリス出自であること——白くて強いブリティッシュネス——をアイデンティティの核心とする若者たちによって採用されるスタイルとなるわけだ。

そのラッズ・カルチャー) が、地元・自国・自民族中心主義、時にセクシズムやレイシズム、Hooliganism や vandalism につながりがちな点は見逃すべきではなかろう¹³⁾。

しかし、印象論ではあるが、アメリカの red-neck や日本のヤンキー——もしくはネット上でのドキュソ (dqn) という呼び方——に比して、イギリスのラッズ (ないしラッデット) たちには、自分の居場所や存在価値が見えやすいように思える。「加熱 (ウォーミングアップ)」一方の日本の教育システムに対し、イギリスのそれが早期から「加熱」と「冷却 (クーリングアウト)」の両刀づかいであるとした志水宏吉の説に従えば、社会的上昇を早期に「冷却」した(された)ラッズたちにも、周囲から認知され、自らも誇り得る文化が用意されているのではないだろうか(志水 2003)。そこに、イギリス社会の知恵と成熟を見ることが可能であろう。ともあれイギリスにおいて労働者階級文化は、残滓などではなく、依然必要なウェイ・オブ・ライフなのである。

参考文献

- Bennet, Andy 2000 "Popular music and youth culture" Macmillan
- Bourke, Joanna 1994 "Working-class culture in Britain : 1890-1960" Routledge
- Cagle, Van 1995 "Reconstructing pop/subculture" Sage
- Cohen, Phil 1980 'Subcultural conflict and working-class community' Hall, Stuart et al.(eds.) "Culture, media, language" Hutchinson
- Fowler, David 1995 "The first teenagers" The Woburn pr Gillett, Philip 2003 "The British working class in postwar film" Manchester Univ. pr
- Hall, S. & Jefferson, T. 1975 "Resistance through rituals" Routledge
- Hebdige, Dick 1979 "Subculture"=1986 山口淑子訳『サブカルチャー』未来社
- Hobsbawm, Eric 1984 "Worlds of labour" Weidenfeld & Nicolson
- Hodkinson, Paul 2002 "Goth" Berg
- Hoggart, Richard 1957 "The uses of literacy",=1974 香内三郎訳『読み書き能力の効用』晶文社
- Hollands, Robert 1995 "Friday night, Saturday night"

- Univ. of Newcastle
- Johnson, Richard 1979 "Three problematics" Clarke, John et al.(eds.) "Working-class culture" Hutchinson
- King, Anthony 2002 "The end of the terraces" Leicester Univ. press
- Laing, Stuart 1986 "Representation of working-class life 1957-1964" MacMillan
- Mackintosh, M. & Mooney, G. 2000 'Identity, inequality and social class' Woodward, Kath (ed.) "Questioning identity" Routledge
- McRobbie, Angela 2000 "Feminism and youth culture" MacMillan
- Malbon, Ben 1999 "Clubbing" Routledge
- Miles, Steven 2000 "Youth" Open Univ. pr
- Muggleton, David 2000 "Inside subculture" Berg
- Moore, David 1994 "The lads in action" Arena
- Mort, Frank 1996 "Cultures of consumption" Routledge
- Mungham, G. and Pearson, G. (eds.) 1976 "Working class youth culture" Routledge & Kegan Paul
- Munt, Sally (ed.) 2000 "Cultural studies and the working class" Cassell
- 小笠原博毅 1999 「カップの底のお茶っ葉」『情況』10-5 (95)
- Redhead, Steve (ed.) 1997 "The club culture" Blackwell
- Reid, Ivan 1998 "Class in Britain" Polity
- Robert, Ken 2001 "Class in modern Britain" Palgrave
- Roberts, Kenneth 1995 "Youth and Employment in Modern Britain" Oxford Univ. press
- Roger, Bromley 2000 'The theme that dare not speak its name', Munt, Sally (ed.) "Cultural studies and the working class" Cassell
- Rowbotham, S. & Beynon, H. (eds.) 2001 "Looking at class" Rivers Oram pr
- 志水宏吉 2002 『学校文化の比較社会学』東京大学出版会
- Springhall, John 1986 "Coming of age" Gill & Macmillan
- Storry, M. & Childs, P. (eds.) 2002 "British cultural identities (second edition)" Routledge
- Thompson, Edward 1963 "The making of the English working class" Victor Gollancz
- Thornton, Sarah 1995 "Culb cultures" Polity
- Urry, John 1995 "Consuming places",=2003 吉原直樹・大澤善信訳『場所を消費する』法政大学出版局
- Whelehan, Imelda 2000 "Overloaded" The Women's pr Willis, Paul 1977 "Learning to labour"=1985 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房
- Wyn, J. & White, R. 1997 "Rethinking youth" Sage

13) こうしたティーンの vandalism を、boy の逆綴りの "yob culture" と呼ぶことも多いが、最近は「女子のヨブ・カルチャー」が社会問題化されたりもしている。

A Note on Class Cultures

ABSTRACT

In British society, class culture still has not lost its significance, whereas matters of gender, ethnicity and generation are becoming relatively more important. In particular, working class culture has maintained its vitality and many people are proud of their sense of belonging to the culture, though heavy or mining industries have declined. In this note, I survey recent studies concerning working class culture and derive three points as follows. Firstly, now class is not only an issue of production but also one of consumption or taste. As a result, many people construct themselves at will as members of the working class, though in some cases they are white collars workers or students. Although some manual workers earn more money than office workers or teachers, they recognize themselves as working class. Secondly, the representations of working class cultures in films or TV dramas revitalize and reconstruct them. Lastly, now the barrier of gender becomes lower, even in working class culture, so lasses or 'laddette' culture has emerged as the counterpart of lads culture, which means masculine working-class men's culture. In conclusion, whereas the aspect of 'class in itself' is decreasing now, the aspect of 'class for itself' is increasing. So, in British society class cultures will be alive for a while.

Key Words: class cultures, Cultural Studies, youth subcultures